うるま市 文化財シリーズ 8

# 平安座島

## HENZA JIMA

平安座島は通称「へんざ」と呼ばれています。
その他には平安座島をあらわす語として「ひやむざ」があります。
その語は各地の神唄を集め、
琉球王府が編さんした『おもろさうし』にあります。
また、17世紀に琉球王府が編さんした『琉球国高究帳』（1635～1646年）にも
勝連間切に「平安座島」と記されています。

©平安座自治会／F・ピッツ撮影

### マーラン船

戦前、沖縄本島中南部の那覇や与那原などとヤンバルと呼ばれた北部の国頭村などを往来した交易の船です。県内では、その船を通称山原船と呼び、平安座島ではそれをマーラン船と言いました。木綿帆を掲げた帆船で、フーシンとも呼ばれています。交易品はヤンバルの材木・薪・炭・黒糖などと本島中南部の日用雑貨が主でした。また、平安座島では常時百数隻のマーラン船が運航し、沖縄・平安座島の経済に大きな影響を与えました（『沖縄大百科事典』など参考）。

近世中期以後、沖縄で最も普及した中国のジャンク船と日本の弁財船の構造をあわせ持つ船です。マーランの呼び名は唐音をそのまま踏襲使用したもので、18世紀の初頭に中国の福建省から伝来した船型です。船の造船費用及び維持費が従来の船に比べ安価であった事から急速に普及し、平安座島では明治期に急激に増産されました。現在では、船大工の越来治喜氏が市の無形民俗文化財に指定され、その技術を継承しています（平成17年3月に指定）。

### 平安座島の伝説

平安座の島は、昔はイチミヌンドゥンチ毛というところに、七、八軒しかお家がありませんでした。また、そこには、海のものばかり食べて暮らしている人々もいました。

昔、今帰仁と首里との戦のときに、今帰仁は首里に落とされてしまい、高花按司といわれる人が平安座の島に逃げてきました。戦が終わり、高花按司は一度伊是名に向かいました。しかし、伊是名にはもう知人もいないため暮らせませんでした。平安座の島に戻ってきた高花按司は、自分が高花按司だと敵に知られないようにするため、「私は伊是名である」と偽名を使い、平安座の島で暮らすようになりました。

伊是名按司（高花按司）はイチヌンドゥンチ毛に住んでいる人々を連れ、もっと住みやすい新しい土地を探しまわりました。そこで三番目に見つけたのが現在の平安座村落になります。

平安座の人々は、伊是名按司のおかげで栄えたのだといい、西グシクに伊是名按司のお墓を造り、祀りました。平安座の村落では今でも清明祭りのときにそこを拝んでいます。

（『よなぐすくの民話』、大正生まれの女性）

### 平安座島の創世

平安座島の古老の口碑によると、約300年前は島の東北に位置するオタクイ原に祖先が居住していました。その場所にはノロ屋敷の跡があるだけでなく、石斧等が見つかりました。また、そこに住む祖先たちは西南部の古島へ移転し、さらに現在の場所へ移動してきました。

（『平安座島の沿革』、昭和7年参照）

### サングワチャー

平安座島最大の行事であり、旧暦の3月3日から5日の3日間にかけて行われます。3日はドーグマチー、4日はトゥダヌイューとナンザ拝み、5日はチナアギモーイという行事を行います。本来は漁師中心の行事でしたが、漁師の減少や海岸の埋め立てにより、行事の意味が変化しています。

3日にあるドーグマチーは海難事故で死亡した身内のために焼香を行う日です。島の南側の海岸で、海難の方角に向かって行います。4日は女性のカミンチュたちを中心としたトゥダヌイューが行われます。一人のカミンチュが魚を銛で突き刺す儀式を行い、その間他のカミンチュたちは太鼓、手拍子を歌に合わせてはやしたてます。この行事が終わった後にナンザ拝みを行います。チナアギモーイは5日に行われるもので、公民館で祝宴を行います。

1950年代の平安座島の様子




沖縄県うるま市教育委員会

### 平安座島の概要

平安座島は、南側のなだらかな傾斜に村落を形成し、北西部は金武湾に接している島です。また、平安座島の北半分には原油施設等の企業が立地し、南東部に村落があります。かつての主な産業はマーラン船での物資の交易でした。現在の産業は石油備蓄関連と漁業などが中心となっています。

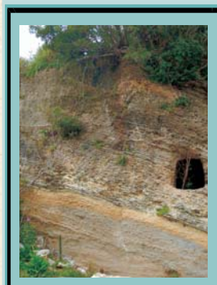
■面積5.32㎢　■人口1,364人　■世帯数561世帯

※面積は2012年4月現在。人口、世帯数は2012年4月現在（平安座自治会）。

### 平安座島の慰霊塔

昭和26年に、忠魂碑だったものを慰霊塔と改称しました。合祀してあるのは各戦没の戦死者、合計207柱です。そのうち沖縄戦の戦没者は198柱です。

### 平安座島の露頭（岩石）



平安座島の東部の道を宮城島に向かうと、左手に20mを越す崖があります。その崖は、新里層、知念砂層、琉球石灰岩でできています。最上部の琉球石灰岩と、その下の黄褐色の知念砂層との境目がはっきり見る事ができ、地層観察や学校の学習には最良の場所になっています。崖壁にくり抜かれた3つの墓があり、「トゥダチヌ墓」と呼ばれています。中には遺骨が納められています。

### INFORMATION

**平安座島**

勝連半島の東北約5ｋｍの海上に位置し、山原船の交易の拠点となった。

■面　積／5.32㎢
（石油企業埋立地を含む）
■周　囲／7km
■最高部／115.6m
■地　質／泥岩層・琉球石灰岩

**沖縄県うるま市教育委員会**
〒904-2226 沖縄県うるま市字仲嶺175
**電話（098）973-4400**

# 平安座島の文化財

## ⑧平安座ハッタラーの石

この石は、平安座ハッタラーが首里から来た武士たちと、力くらべ勝負をした際に持ちあげて投げたとされています。この人物は、名護市久志から移住してきた山城家の者で、帆船の船頭をしていました。平安座島の英雄的存在として語られています。その詳しい伝説は、『よなぐすくの民話』で紹介されています。

## ⑩カミアサギ

ノロ(神女)や自治会長たちが来訪神を招き交流する場所です。その場所ではウマチー行事(旧暦2月、3月、5月、6月15日)などが行われます。これは島の人々が健康でいられるように祈願し、神に豊作の報告を行う行事です。神アサギでは役割によって座る位置が決まっています。

## ⑪カミヤー(神屋)

カミヤーはノロ殿内の一角にあり平安座の氏神が祀られています。その場所は年中行事に関わりを持ち、平安座島の行事があるとノロ(神女)や自治会の人々が集まって行事などの報告をします。現在のカミヤーは、1990(平成2)年に建造されたものです。

## ⑲クワディーサの木

クワディーサとはモモタマナのことをいいます。この木は彩橋小中学校(旧平安座小中学校)の敷地内にあり、樹齢約300年になります。クワディーサのある場所はシヌグの行事で拝む場所の一つであるため「シヌグモウ」と呼ばれます。シヌグでは、ノロ(神女)たちがイリーグスクとアガリグスクを拝んだ後、シヌグモウに移動し、島民の安全などを祈願します(昭和62年、名木指定)。

## ⑳ナンザ(南座岩)

旧暦3月4日にナンザ拝みが行われます。ニッツ(根人)や自治会長などが島の東にある「ナンザ」という岩に行き、タコなどを供え大漁豊漁を祈願します。その後、岩から帰ってきた男性達は手ぬぐいや仮面などで仮装をし、浜辺に向かいます。浜辺で待つノロ(神女)たちは、浜に下り三味線や太鼓を打ち鳴らし三月旗を挙げて歌い踊り、ナンザ帰りの男たちを迎えます。

世禮國男の銅像

『おもろさうし』に関する研究や『声楽譜付野村流工工四』の編さんなど、沖縄の文化史の中で高く評価されている。

越来治喜さんとマーラン船

世開之碑

1978(昭和53)年に海中道路接続記念碑として建立された。

**平安座島を歩く前に読んでみよう！**

- 松井健／『沖縄列島―シマの自然と伝統のゆくえ―』東京大学出版、2004年。
- 琉球大学歴史研究会／『歴史研究第三号[平安座島調査報告]』、1967年。
- 琉球大学民俗研究クラブ編／『沖縄民俗第6号～第10号』第一書房、1988年。
- 遠藤庄治編／『よなぐすくの民話』、与那城村教育委員会、1989年。
- 親川光繁／『与勝の歴史散歩』、安里公認会計士事務所、1990年。

㉔カチ(魚垣)

㉓海底にあった獅子

**民俗文化財・その他文化財**

1. 世開之碑
2. コーヤー(龕屋)
3. 火の神石
4. 御先川端と二代川端按司墓
5. ナナンチョーデー(七人兄弟)墓
6. ジュリ墓
7. 製瓦工場跡
8. 平安座ハッタラーの石
9. 地頭火ヌ神
10. 神アサギ
11. 神屋
12. 池味殿内
13. ウチヂナー
14. トゥダチヌ墓
15. イチミグナ(集骨場)
16. 慰霊塔
17. チョウノハマ
18. シヌグ毛
19. クワディーサの木
20. 世禮國男の銅像
21. ナンザ
22. 塩田跡
23. 海底にあった獅子
24. カチ(魚垣)

**井泉**

1. リーガー(梯梧泉井)
2. 石河(イシガー)
3. ミーガー(新河)
4. 国吉之河
5. カー
6. 仲程ガー(歌碑)
7. カーニヌカー
8. 濱之河
9. ウィーヌカー
10. 与佐次河(ユサヂガー)
11. ユタカガー
12. シプカラ(塩辛)ヌカー
13. ワチヌカー
14. サカヌカー

**遺跡**

1. 平安座貝塚
2. 平安座イリグスク
3. 与佐次原遺跡散布地
4. 下与佐次遺物
5. 平安座東ハンタ原遺跡
6. 平安座アガリグスク

**名勝**

1. 平安座島の露頭

● 印は民俗文化財・その他の文化財
● 印は遺跡
● 印は井泉

## ❷イシガー(石河)

生活用水として使われていた場所で、旧正月の際には一部の平安座の家族や親戚達が拝む場所でもあります。写真集『ひやむざかなもり』では、当時のイシガーの姿や井戸に拝みを行う様子を捉えた写真が紹介されています。

## ⑩与佐次河(ユサヂガー)

この湧き水はユサンディガーとも呼ばれています。水飲み場や産湯として利用されたこともあり、昔から神聖な場所となっています。日本でいう万葉集にあたる沖縄の『おもろさうし』には、うらおそいふしに「ひやむさ　よさきかは」とあり、古い資料にも出てきます。旧暦1月3日にあるウビナディーの行事では平安座島の各家の家族や親族の拝み場所になっています(平成7年、市の有形民俗文化財に指定)。

## ❷イリーグスク

平安座村落の後方、島で最も高い場所にあり、南西側は断崖になっています。グスクの内部にはイビの祠があり、その中にはご神体としてトウカムリガイが7個置かれています。ノロ(神女)たちが年4回グスクに登り、島の安泰を祈願する行事が続いています。琉球王府が編さんした『琉球国由来記』には平安座村の「森城」とあり、それがイリーグスクにあたります。その由来記では「神名・島添大神之御イベ」が鎮座していると記述しています(平成7年、市の史跡に指定)。

## ❻アガリグスク

アガリグスクの頂部は岩上墓となっており、グスクの南側下段の方に石製の香炉が置かれています。イリーグスクと同様にイビの祠があり、その中にはご神体としてトウカムリガイが7個置かれています。島の安泰を祈願する行事の際は、最初にイリーグスクを拝み、次にアガリグスクを拝むことになっています。

## ❺平安座東ハンタ原遺跡

平安座村落の後方、東西に伸びる琉球石灰岩の平坦な畑地に形成され、南側は断崖(ハンタ)となっている遺跡です。多和田真淳氏が発見し、1968年に嘉元政秀氏らによって発掘調査が行われました。その遺跡は、約2,500年前(沖縄貝塚時代中期、縄文時代晩期に相当)で、平安座島の中で最も古い遺跡とされています。この遺跡の出土物に土器片や石斧、貝製品、骨製品などが見つかっています。